

「歯科技工士問題の改善を目指して」

第10章 おわりに

ここまでいくつかの章に亘り、技工（士）問題の現状分析を行い、改善への道を探ってきました。残念ながら、これですべて改善できるといった策を見つけることができなかったのは事実ですし、それはコンテンツ作成当初から予想できていたことでもありました。しかし、今のままで良いわけはありません。ですから、みんなの歯科ネットワークとしてはこれからも引き続き、技工（士）問題に取り組んでいきたいと考えています。

このコンテンツをまとめ上げ、最後に考えたのは「歯科技工物の質」ってなんだろうということ。歯科技工士は低い技工料金でも「患者さんの口にはいるのだから」と質を落とさぬよう必死でがんばっています。しかし、それを患者さんはこれっぽっちも知らない。質が極端に落ちればあるいは気づくようになり、大きな問題として世の中に出るかもしれませんが、少なくとも今は目に見えては「患者さんは困っていない」ようです。では、患者さんが気づくほど質を下げればいいのかとさえいえば、もちろんそんなことが出来るわけはありません。

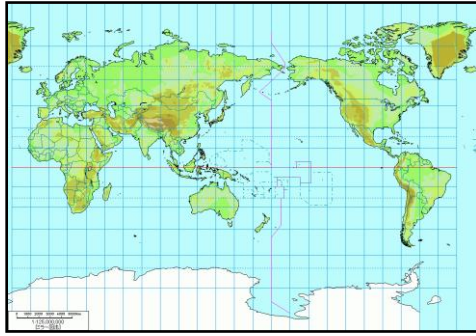
また、技工料金と歯科技工物の質が比例するのかと聞かれれば、それは必ずしもそうだとも言えないかもしれません。

良質な技工物を作りたいという気持ちと、この価格では良質な技工物は作れないという気持ち。ここに歯科技工問題の大きな問題があるのです。

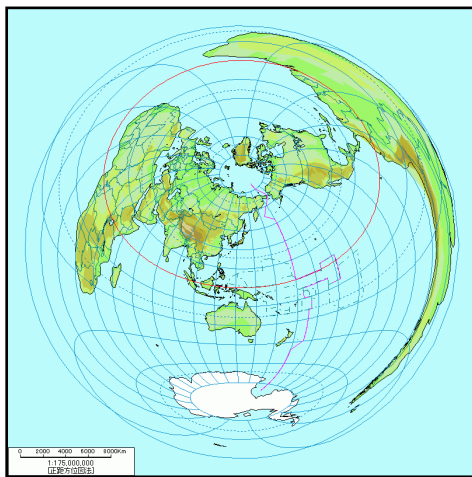
ただ、みんなの歯科ネットワークは患者さんも医療者も共に幸せになれる制度を考えるNPOです。どちらかに負担を強いる制度は早晚崩壊します。ですから、歯科技工物の質を考える時、歯科技工士を取り巻く環境の改善が絶対に必要だと考えています。そしてそれは専門知識、技術を持った有資格者にふさわしいものであるべきだと考えます。そういう環境から良質な医療は生まれてくるのです。

関係者は良い環境を求めて活動をする責務があります。そしてその改善へのスタートは現状の正しい認識にあると思います。現状の正しい認識は、改善への最低条件でしょう。この認識を誤れば改善への道からも遠ざかってしまいますが、多方面から聞こえてくる主張は、現状を正しく認識していないものも多く見受けられます。希望と現実の区別ができていないような主張も聞かれるのも事実なのです。

唐突ですが、ニューヨークは、日本からみたらどちらの方角にあるでしょうか。太平洋の向こうだから、東のほうでしょうか。下図は、メルカトル図法というので描かれた世界地図です。世界地図といえ、多くの場合この形です。



この地図を見ると、日本からみたニューヨークは、ほぼ真東に見えます。太平洋を横切り、緯線に沿って行けば着くようにみえます。でも、よく考えてみると地球は、丸いのです。



そのことを考えて地図を書き換えてみると、上図のようになります。さて、ニューヨークは、どちらの方角になりましたか。太平洋の向こうではなく、北極の向こう、北北東ぐらいになりました。

こんな感じで、実は普段見えていることから考えていることが、全くの方向違いであることが少なくないと思います。技工（士）問題にも同じようなことが言えるかもしれません。

この国の歯科技工物の質を担保あるいは向上させるという目的の為に、このコンテンツを通して現実を見つめ「どうすべきか」をみんなで考えていくきっかけになっていければと考えております。



2010年11月23日、大分県保険医協会主催で、「技工料金について考える」という講演会が開催されました。当NPOの副理事長も講演しました。

この会は、歯科医師と歯科技工士が同じ会場で技工料金について話し合うという画期的な会であったと思います。歯科医師が歯科技工士の前で、また歯科技工士が歯科医師の前で技工料金について講演することが今までであったでしょうか。

この講演会が一つの契機となり、歯科医師も歯科技工士も、自分自身の問題として、また、歯科医療が正しい発展をするために、何かが起こることを期待しています。

いや、期待するのではなく、私たち自身が何かを起こさなければならないのです。

国民健康保険においてその提供する医療の質は、「最適水準」であるべきか、「最低水準」であるべきかの議論がありますが、現在は「最適水準」であるべきであるという意見が主流となっています。

歯科の場合、最適水準の歯科技工物を制作するためには、歯科技工士にはどのような労働条件が最低限必要であるのかを検討しなければなりません。それが歯科医療に携わるすべての関係者の一つの責務でしょう。もちろん、それは歯科技工士のためではなく、歯科医師のためでもありません。第一義的には国民のためです。

歯科技工士は、口腔の健康を失った患者の口腔機能を回復するために働く歯科医療者であり、技術者です。その仕事の内容を考えれば、職人といっても差し支えはないと思います。職人は、職人としてその請け負った価格には関係なく自分の持つ技量を十二分に発揮して納品しようとすることも多いでしょう。

その結果、まじめな職人ほど、収入が少なくなる、あるいは長時間労働をこなさなければならなくなるといったことが起きてしまいます。場合によっては、歯科技工の現場から離職してしまうことも起きています。

歯科技工士になるための養成学校費用、技術習得費用など、人的資源の多大な損失が起きています。歯科技工士養成学校には税金も投入されていますから、金銭的な無駄もあるといえます。

今の「技工料金は市場価格である」というシステムが採られている大きな理由として、患者負担をできるだけ増やさないことがあります。患者、国民が求めるのは「安くてよいもの」でしょう。しかし、価格については、技工料金が高かろうが安かろうが、患者が支払う窓口負担金は変わらないので、技工料金の高低は、直接の患者への影響はありません。（ただし、いわゆる技工差益を誰にどのように還元するかは議論される余地はありません。）

となれば、問題となるのはやはり質の問題になります。しかし、これまで何度も書いてきたように、「質」となると評価が難しいですから、質を担保することで良質な歯科医療提供体制を確保するしかないことになります。

質の担保ということになれば、技工料金の高低に関わらず歯科技工士という資格が質を担

保していることとなります。一定程度の競争をしても、この資格のフィルターが適切に働いている限りは、患者にも害は生じないはずです。

しかし、適正な競争を超えた過当競争となればどうなるでしょうか。

バスの運転手などの労働環境では、乗客の安全に直接繋がります。過当競争が、運転手の過労につながり、結果事故につながります。そして、労働時間と事故率の統計データもあるはずです。

歯科技工の問題で弱いのは、労働条件が技工物の質にどのような影響を与え、結果歯科治療の質にどのような影響を与えたかについて検討されたことがない、データがないところにあるのではないのでしょうか。技工（士）問題の解決のためには、それを調査、提示することは最低限必要なのではないのでしょうか。

国民の視点で見れば、技工士を取り巻く環境よりも「実際に出来てくる技工物の質」の方が大きな関心でしょう。

ただ、技工物は人間がひとつひとつ手で作るものであり、技工士の経済的、肉体的苦境が続けば質を保つことはどんどん難しくなることは誰でも理解できます。

技工物の質が下がるのを回避するために、価格競争のみで生き残るのではなく、最低でもコストを捻出できるだけの安定した技工料を確実に技工士が確保できるような方策を知恵を絞って考え出さなければならないでしょう。

歯科技工（士）問題が、歯科業界の問題であるという共通認識に欠けているのが現実です。

歯科医師はまるで対岸の火事を見ているようにも思われます。

国民に良質な歯科医療を提供するためには、歯科医療従事者の緊密な連携が必要ですし、そうであるならば、歯科技工（士）問題は、歯科業界全体の問題でもあるはずです。

ここまで、ながらくこのコンテンツに目を通していただき心より感謝申し上げます。

もちろん、このコンテンツを書くことが私たちの目的ではありません。これからも様々なアプローチを続けていく所存です。

皆様のご協力、ご指導をこれからも宜しくお願いいたします。

2010年 12月吉日

NPO法人 みんなの歯科ネットワーク

TEAM Minerva

MINNA
みんなの歯科ネットワーク